

## 実践事例 1 千葉市立土気小学校

### 1 実践研究校の概要

本校は、千葉市東南部に位置し、明治6年に創立された伝統校である。約20名の教員がおり、児童数388名で15学級(特別支援学級含む)の中規模校である。学区は広く、バスで通学する児童もいるが、卒業生は土気中学校に進む一小一中学区となっている。転出入はそれほど多くなく、児童同士の関係は、低学年から続き、互いのことをよくわかり合っている様子が見られる。良いところを認め合い、不足している部分を補い合える良い関係がある反面、新しい関わりが作りづらく、入学時から続く人間関係に慣れてしまう傾向も見られる。互いのことをわかり合った関係の中では、普段のあいさつも慢性化したり、思いを表しにくいことも察して行動できてしまったりという様子がうかがえる。

### 2 「学校評価結果から学校改善を図る」実践研究の内容

#### (1) 重点目標の設定とミドルリーダーの関わり

本校の現状について、教職員による自己評価を行った。各教員の認識を確認するために、「問題と思われる点・改善が望まれる点」についてアンケートを実施した。はじめの時点では学校の現状を振り返るために対象を絞らずアンケートを実施したが、そこで出された意見は下記の通りであった。

#### 児童に対して

- ・あいさつ…生徒指導と絡めて  
あいさつや返事をはっきりと  
相手に伝わるあいさつを  
臨機応変なあいさつを
- ・自分の思いや気持ち、考えを表す、いろいろな場面での表現力
- ・物の管理…落とし物、忘れ物、落書き、整理整頓
- ・言葉遣い
- ・ろうかの歩行
- ・掃除ができない…きれいになったことが実感できない

#### 保護者に対して

- ・児童の成長を保護者に伝える努力をする

#### 職員間で

- ・打ち合わせ等の効率化

児童に関する課題が多かったため、対象を児童に絞って重点目標を設定することにした。結果から児童に関する事柄を下記のような児童像として再度提示し、重点目標を絞っていった。

- ①場に応じた返事・あいさつができる児童
- ②児童の表現力を高める
- ③物を大切にできる児童
- ④公の場(ろうか、掃除場所)での過ごし方を身に付けた児童

その結果、あいさつと表現力を重視して本校の本年度の重点目標を下記のように設定した。

#### 「場に応じた表現力を身に付けた児童を育成する」

学校評価の実践研究を受ける形でのスタートとなったため、研究主任がミドルリーダーとなった。重点目標の設定に関して、学校長の学校経営方針をふまえてアンケートを実施、各教員に対しては今回の研究の概要や教育目標や経営方針をふまえた形での回答を依頼した。明確でわかりやすく出されている学校長の経営方針(児童:「今日は何があるかなとワクワクして登校し、楽しかったと思って下校」職員:「やる気を持って出勤し、充実感を持って退勤」保護者:「確かに我が子どもは成長していると実感」地域:「土気小の子どもは、地域の誇りだ」と思える学校づくり)を用紙に明示した上でアンケートを実施する

ことで、自分たちの目の前の学校の様子を思い浮かべて重点目標設定ができたと考える。

## (2) チーム議論 I の実際とミドルリーダーの関わり

### ① 学校評価改善のための組織

児童の生活全般に関する重点目標を設定したため、生活年齢の近い近接学年の方が取り組みやすいと考え、低、中、高で学年を分けてチームを構成した。低学年チームは、1・2年生担任それぞれ2名ずつと特別支援学級担任、少人数担当の6名。中学年チームは、3・4年生担任の2名ずつと特別支援学級担任、少人数担当の6名。高学年チームは、5年生担任3名と6年生担任2名、ことばの教室担任と音楽専科と教務主任の8名で構成した。チーム議論に於いて司会を行うミドルリーダーが6年生担任2名のうちの1名なので、議論自体には参加しにくいと考えて高学年チームの人数を多めに設定した。教頭、校長も会議に出席し全般の様子を把握したり助言を行ったりした。

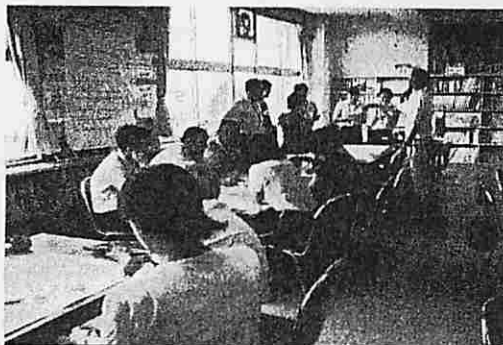
### ② 現状把握

- ・「小さなところから、できるところからよくしていく」、「教員のチームワークが大事」など、改善の趣旨をミドルリーダーが説明した。
- ・重点目標である児童の表現力に関し、その現状を各教員が付箋に記入した。ひととおり書き終わったら、別のテーブルに模造紙を広げ、その上に付箋を貼って内容を紹介した。1人で20枚以上書いた教員もいた。さまざまな側面から現状に関する意見が出された。

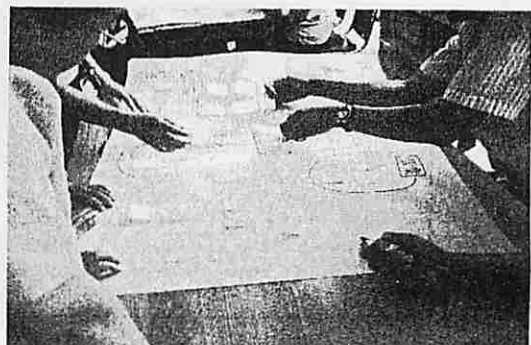
### ③ 課題の設定と目標・方法の決定

#### 課題の設定

- ・出された付箋をグループに分けた。「あいさつ」、「言葉づかい」、「発表、話す」、「話す技術」、「日常生活行動」、「話し方・内容」、「学習」、「友達との関わり」などのグループに分けられた。グループどうしの関係を矢印で示す。色ペンで矢印を色分けするなどの工夫がなされ、わかりやすい図に仕上がった。図を見ながら具体的課題を設定した。



チームごとに分かれ話し合いを行う



付箋を用いて現状を出し、分類した

- ・具体的課題は、以下のようにまとまった。

低学年:「あいさつ」 中学年:「自分から進んであいさつをすること」 高学年:「話す技術」
--

#### 実行方法の決定

- ・具体的課題を達成するため、どのような方法を実行するかアイデアを出し合った。各チームとも、アイデアが書かれた数十枚の付箋が模造紙上に出された。“成果があらわれるか”と実行への“負担の度合い”の基準でアイデアを判断した。
- ・実行方法を1つに決めるのが難しいとの声もあったが、ミドルリーダーがくり返し議論に関わり、またベテラン教員も若手教員も積極的に意見交換を行ったことで実行方法を絞ることができた。  
決定された実行方法は次のとおりであった。

低学年:「机にカードを貼り、あいさつした数だけ色を塗る。帰りの会で呼びかける」  
 中学年:「朝の交通当番が進んで児童、PTAにあいさつする。教室に入るときにあいさつする等」  
 高学年:「話や俳句の暗唱をする」

### 目標の決定

- ・ 実行方法を決めると同時に、どのような児童の姿を目指すかを検討し、目標として設定した。

低学年:「地域や家族に対して進んであいさつできる」  
 中学年:「自分から進んであいさつをすることができる」  
 高学年:「子どもが、今よりも自信を持って声を出せるようになる」

各チームとも9月から実施することとし、たとえばあいさつ強化期間などを設けることを検討した。

### 発表

- ・ 各チームで決めたことを発表し、校内での共有を図った。ミドルリーダーから、実行に移すために、8月下旬に各チームで準備等を行うなど、もうひと手間かけて欲しいことを伝えた。

### ④ 実行

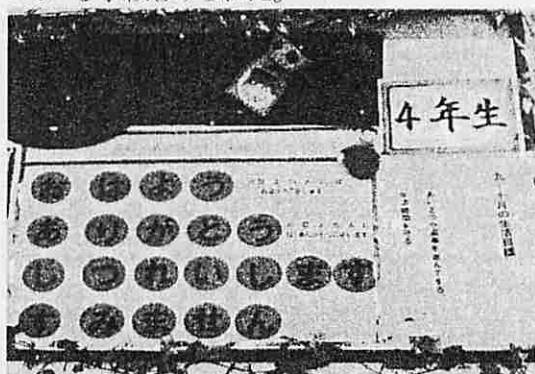
低学年チームでは、あいさつカードを作成し、児童の机上に貼り、機会に応じてチェックを行った。色を塗ることができる、自分の行為を視覚的に確認することができ、励みになっていた。

中学年チームでは、委員会活動に参加しているところから、放送委員会では毎朝の放送でオアシス運動についてふれることで啓発し、運営委員会では登校する児童にあいさつ運動を行って啓発を進めた。また、児童が日常目にする階段の踊り場に掲示物を作成して意識づけを図った。

高学年チームでは、暗唱すべき話や俳句などの選定を難しく捉えてしまい、行動に移しにくいことに気がついた。せっかく暗唱するならば、価値のあるものをねらおうと考えて選定に手間取ってしまった。また、授業とは別の機会を実施するとすると、児童にとって何のために実施するかという意味づけとそのための時間の確保が必要となってしまったと考えた。そのような中で、国語の教材文の中の一部分を暗唱したり、調べたことを報告する際の発表原稿を暗唱するなどの試みを行っている学級もみられた。



児童の机上に貼ったカード



階段のつきあたりに掲示

### ⑤ チーム議論 I におけるミドルリーダーの関わりについて

3時間ほど要するので教務主任と相談して夏季休業中に日程を定め、場の設定や用具の準備を行った。全体の進行は PHP 総合研究所より提示されたモデルに準じて行った。その際、参加する教員に会議の流れがわかるように配付物を作成したり、各チームの様子を見ながら何を話し合うべきなのか助言をしたりした。学校改善に際し、大きく構えるのではなく「小さなどころから、できるところからよくしていくこと」や、会議を通して課題を共有し、共に実行していくことで「教員のチームワークの向上」が目指せるようなものになるよう伝えた。現状把握の場面では、ブレインストーミングの手法により、考えたことや思ったことを自由に出せるよう雰囲気づくりを行った。課題の設定では、張り替えの効く付箋の特性を活かしてグループを作ってみることを助言した。できあがったグループの関連性をチーム内で共有できるよう、各チームを周って話し合いを進

行した。実行方法の決定の段階が一番の難関であった。多く出した課題はどれも気になることであり、まとめたグループの項目はどれも対処すべき課題となっているが、実践するためにはひとつに絞らなければならない。各教員の重視する課題を引き出しつつ、本年度の重点目標に照らして、効果の望める取り組みやすいものに絞るよう助言した。今回の学校評価に関して必要な日程を年度当初には組んでいなかったため、ミドルリーダーは教務主任や教頭と相談しながら、チームそれぞれの都合と学校の日程をすりあわせていった。8月下旬に教員の協力により準備を行って9月を迎えた。高学年チームはミドルリーダーが属するが、話し合いにきちんと参加できなかったため経緯やねらいの共有が不十分であり、実行の推進になかなか参加できなかった。時期的にも授業研究が続く時期になってしまったため、高学年チームの実行はなかなか進められなかった。その中で、普段の学習において暗唱を意識したり、声を出す機会を意識したりして取り組むことなど、できるところから取り組んでもらえるよう声をかけていった。また、実践前の段階として児童に対するアンケートを作成し行った。

### (3) チーム議論Ⅱの実際とミドルリーダーの関わり

#### ① 実行状況チェック

チーム議論Ⅰで決定した内容について確認を行い、9月以降実践してきた事柄について話し合いを行った。チームや学年、それぞれの教員が行って出た結果を1項目につき1葉の付箋に記入した。前回同様に模造紙を広げ、その上に付箋を貼って内容を紹介した。チーム内で共通理解をして行ったことに対しても、各人によってさまざまな行い方や捉え方が出され、多様な見方や考え方を知ることができた。その中からうまくいった実践をまとめて、どんな部分がよかったのか特徴を捉えてチーム内で共有した。

#### ② 方法の改善と目標の再確認

行ってきた実践を振り返り、それらを継続・充実するために、実行方法の改善策を検討した。うまくいった実践の特徴を元に、実行方法にその特徴を盛り込んだり(例:「文章の音読」という活動に対してうまくいった要素である「朝の会や帰りの会での活動の位置づけ」を加える)、その特徴の不足する部分を補ったり(例:うまくいった要素「期間を設定して集中して取り組んだ」に対して「期間以外での対応」に目を向ける)というアイデアを出し合った。出されたアイデアを元に、チームで共通して行う改善策を共有した。しかし、前回の共有がさまざまな実践を生んだように、今回の共有もあくまでも共通確認であり、今後も各人の個性は活かされてよい影響を与えることが予測される。

目標も再確認したが、どのチームも前回の方向性で継続することになった。

#### ③ 実行

各チームでは以下のような実践が実行されている。

低学年:「あいさつカード」期間を設け、再度取り組む。→自分たちだけでなく、他学年に対してのあいさつも評価に加えて対象を広げる。→目標である「地域や家族に対して進んであいさつできる」への視野の広がりを促す。  
中学年:放送委員による「オアシス運動」+「会釈」(場に応じたあいさつの推進)の呼びかけを継続する。  
「生活ふり返りシート」を配付・実践することであいさつについて意識づけを行う。  
高学年:国語の教材、詩・俳句、百人一首を、行う時間や場(朝の会や帰りの会、週2回など)を設定して継続して行う。  
敬語については、職員室入室時や委員会活動などの場面で意識的に指導する。

#### ④ チーム議論Ⅱにおけるミドルリーダーの関わりについて

実施時間は前回とは異なり1時間ほどなので教務主任と相談して5校時授業日の放課後に日程を定め、場の設定や用具の準備を行った。全体の進行は今回もPHP総合研究所より提示されたモデルに準じて行った。参加する教員も前回の経験があるので流れは大体理解できておりスムーズに進行が行えた。各チームの様子を見ながら何を話し合うべきなのか助言を行った。前回以降の実践で、できなかったマイナス面ばかりに目を向けるのではなく、少しでも効果のあがったプラスの面に注目してもらうことで、実践の改善やチームワークの向上が図れるように心がけた。各チームでもどのように議論を行えばよい

のか見通しがもてていたため全体の進行には手間取らず、自分の属する高学年チームの話し合いにも参加して前回は難しかったチーム内の共通認識のまとめや実行方法の確認も行うことができた。また、前回と同内容のアンケートを児童に実施し、教員へも今回の学校評価のあり方についてのアンケートを実施した。

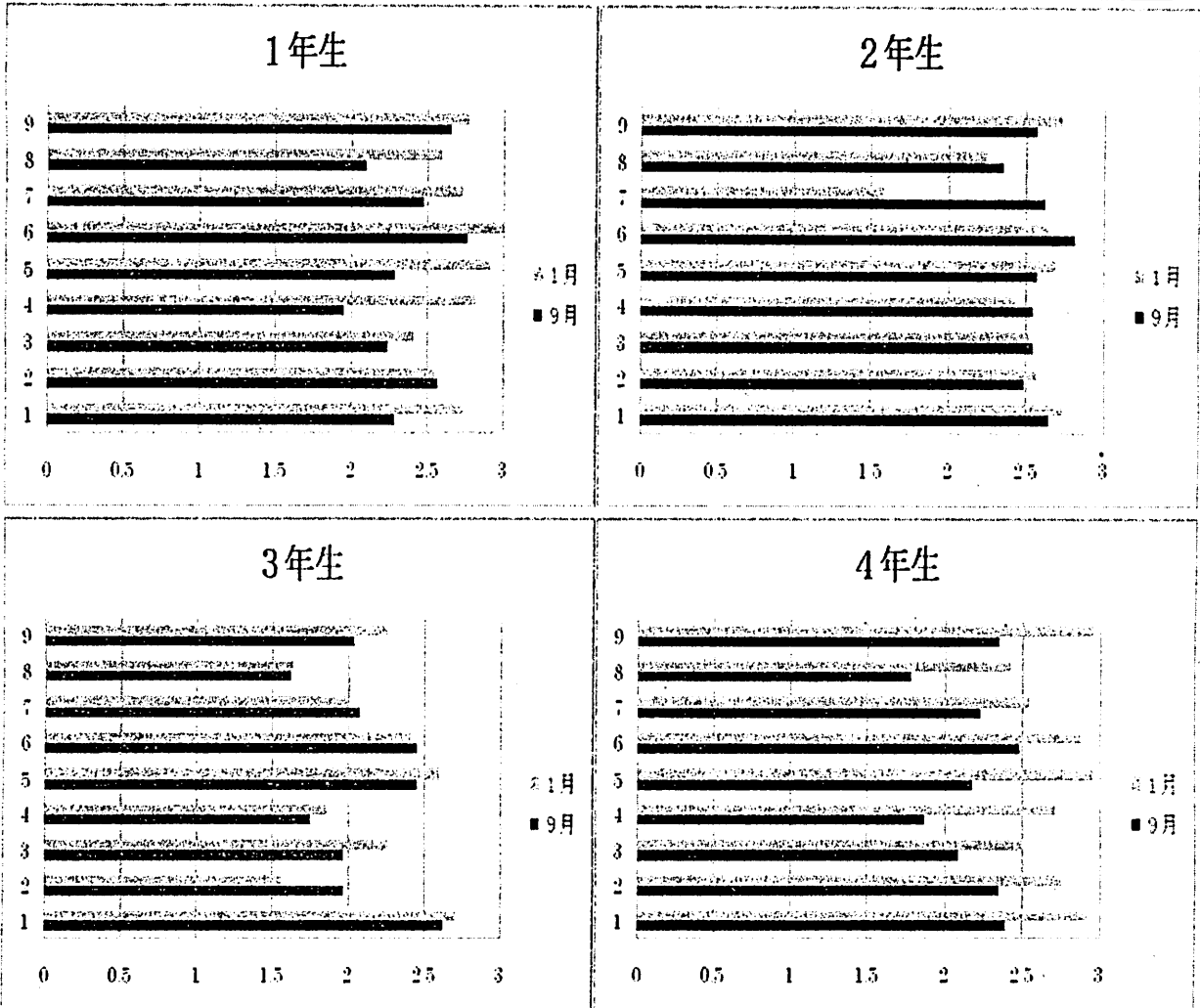
### 3 成果と課題

#### 児童における成果と課題

##### 低・中学年（あいさつ）

9項目について選択式アンケート（3が望ましい姿、0が望ましくない姿の得点方式）

アンケート項目  
 あいさつの対象：①家の人へ ②先生へ ③友だちへ ④地域の人へ  
 あいさつの種類：⑤おはようございます ⑥ありがとう ⑦しつれいします ⑧すみません  
 ⑨ごめんなさい



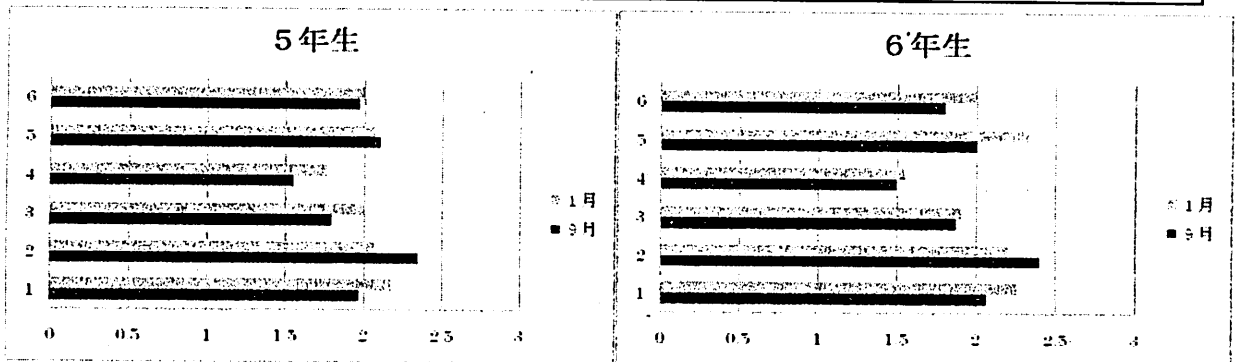
- 2年生がよく達成されている…発達の様子との一致が伺える。
- 1年生、4年生の1月の伸びが大きい…指導の効果が顕著に表れた。
- どの学年も向上が見られる。
- 低・中学年の児童は⑦、⑧を使用する場面は少ない。
- ⑧と⑨の使い分けは捉えにくかった。

#### 高学年（話す技術）

6項目について選択式アンケート（3が望ましい姿、0が望ましくない姿の得点方式）

アンケート項目

あいさつについて：①大きな声でのあいさつ ②場に応じたあいさつ ③大きな声での返事  
発表について：④クラスの前で ⑤班の前で ⑥教科書の音読



○概ね向上が見られる。

○5年生では①③の向上が見られる→大きな声が出せるようになった。

○6年生は⑤⑥の向上が見られる→少人数の中での発表や音読ができるようになった。

●大きな向上は見られにくい→発達の様子と一致。

●②は判断はできるが実際には行わなくなっているようだ。

教員における成果と課題

重点目標から実践について（学校評価の内容）

低・中学年チーム（あいさつ）

○確実に進んであいさつできるようになっている。

○放送等で常に推進することで「オアシス運動」は浸透している。

○中間で評価・手立ての見直しをしたことで効果が見えてきた。

○「あいさつカード」週間のときには意識が高まり、進んであいさつをする姿が見られた。

○行事や機会を捉えて学級指導をして意識が高まった。

●声の大きさには個人差が大きい

●使用しない言葉がある。個人差がある。

●「あいさつカード」週間以外の指導が不足していた。

高学年チーム（話す技術）

○声を出したり発表したりするようなコミュニケーション能力の向上が見られる。

○声が出せないのは、児童の自信のなさや失敗したときの恥ずかしさが大きな原因なので、「大きい声で言いなさい」という指導だけでは効果がなく、クラスの雰囲気は何より大切だということがわかった。

○古典を声に出すことでおもしろい表現や言葉があることを知ったり、昔の人の考えに共感したり、意味の理解は完璧ではなくとも思いを込めて音読する姿が見られた。

●恥ずかしい児童や自信の持てない児童への支援が難しかった。

●高学年になってからでは遅い。発達段階や個々の成長やがんばりの過程の評価が必要であり難しい。

学校評価の取り組みについて（PDCAサイクルの実施）

○一人では思いつかない改善案やいろいろな意見を聞くことができた。

○職員間で共通して取り組むことで児童への働きかけを意識して行えた。

○全校で取り組むことができた。

○研修の方法を学ぶことができた。他学年のことを知り、自学級を客観的に見られるようになった。

●具体的な手立ての実行が教員により差がある。

●各学年や各チームで中心となる人物がいなくなかなか進まなかったり実施できなかつたりした。